

# 教養講座 地元学を考える

第百四十五回「地元学を考える」  
(二〇一六年一月三十日開催)

「中日友好と  
祖母李徳全」

講師 羅悠真さん

「中日友好と祖母李徳全」  
に参加して

前日の雪は久方ぶりに銀世界を創り出し、集まってくださる皆さまの足は大丈夫だろうかと思いをもちました。当日は抜けるような青空とまばゆいばかりの陽光、今日の催しが祝福ですか？と誰かに聞いてみたくなるような快晴となりました。

最近「中日友好」の話題がはかれる、そんな風潮を感じさせる今日この頃です。しかし、民間が繋いだ戦後の日中友好の話とそれを裏づける映像は、私たちを驚愕させるものでした。

今回の講師の羅悠真さんは、日本の大学への留学経験者もあり、現在は中国・日本関連民間協会の代表を務めている方です。戦後日本人千名ほどの BC 級戦犯の無条件引渡しの名簿を携

えて中国の紅十字団代表として来日した李徳全さんの孫に当たられる方とのことでした。

当日は、NHK ドキュメンタリー映画「認罪―撫順戦犯管理所の六年」という映像を見ることから始まりました。日本人の戦犯といわれた方々、そして中国の戦犯管理所の所長だった方の行動や記録、周恩来首相と交わしていたやり取りや証言という形で当時の記憶をまとめたドキュメンタリー映像でした。

戦犯の無条件返還という出来事は、一九五四年日中の国交の無かった時代、中国は周恩来首相の同意を得て、中国の紅十字団から日本の赤十字団へ名簿が渡されるということを実現しました。捕虜となり終戦後の世界の中で何時しか戦犯となり、六年もの間戦犯管理所の中で生活した記録。拷問なども無く食事や娯楽、スポーツなどの自由も与えられ、自分たちが戦争の中で行った行動悪行を徹底的に思い出させられながら何度か書いた反省文。上官の命令であって、自分の意志で殺したのではないという思いと葛藤の中、書くこと

や語ることから自分の犯した罪を認めていく過程を語る証言もありました。また、中国の方々には、自分の親兄弟を殺した日本人を、中国の人民も満足な食事を取れない今、なぜこのように手厚く世話をするのか、悩みながらの勤めであったと語っている姿は強烈でした。六年という長い期間をともに過ごし、スポーツをしたり、餅つきをしたりともに学び、日本人の中には六年間に感謝する方々も出るほどであったということです。



▲中国と日本、友好の歴史と未来を考える地元学となりました

映像後の講師は、「戦後の日本と中国との交流は、民間からの草の根的発想が大切です。ぜひ、今の福島を経験を生かした世界の安全基準をつくるために、世界最高の日本の技術力と世界最大の人口と経済力の中国で、民間から始めましょう。日本の中小企業もここ数十年苦勞の報われないシステムに入ってしまったままです。」と経済的な話をたくさんいただきました。

講演終了後、会場からの質問や意見は、これまでの中国と日本の歴史や戦後の残留孤児の養父母への感謝やその後の消息や様子など、人道的な意見に集中し、日本人がこれまで知らずにいた戦後のビッグニュースをあらためて知る機会となりました。映画「大地の子」の話など会場の方々と意見交流もできました。ようです。古来からの交流が育んできた日中の民間交流は、幾重にも折り重なり民間で健全に引き継がれてきたことを強く感じた瞬間でした。(C・N)

## 日韓国交正常化50周年 ―友達だからできること―

＜講師＞ 鄭玄実さん (NPO法人ふくかんねっと 理事長)

＜日時＞ 2016 年 2 月 27 日 (土) 13:30～15:00

＜会場＞ まちなか夢工房 2 階 ＜参加費＞ 500 円

## 日本の基督教の歩み ～ザビエルから二本松キリシタン殉教まで～

＜講師＞ 柳沼千賀子さん (NPO 法人福島やさい畑～復興プロジェクト理事長)

＜日時＞ 2016 年 3 月 19 日 (土) 13:30～15:00

＜会場＞ まちなか夢工房 2 階 ＜参加費＞ 500 円

### ＜講演内容＞

1549 年にザビエルが伝えた基督教は、会津地方にも広がりました。しかし、1587 年『バテレン追放令』により迫害が始まり、1633 年二本松城下、阿武隈川の供中の河原で 5 人が火刑、9 人が斬首されたそうです。神学を研究し、基督教系の学校にて宗教科教員として教壇に立たれておられた柳沼さんのお話いただき、日本キリシタンの信仰の跡を辿って参ります。

\* 参加人数把握の為、地元学講座各回ごとに出欠のご連絡をいただければ幸いです。  
(tel 024-524-2230 または fax 024-525-8285 までお願いいたします)

教養講座  
地元学を考える  
第百四十六回予告

教養講座  
地元学を考える  
第百四十七回予告